入学特集

日本工業大学 通信

NIPPON INSTITUTE OF TECHNOLOGY

第103号

編集・発行
日本工業大学
広報課
〒345-8501 埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1
☎(0480)34-4111(代)
http://www.nit.ac.jp

平成12年（2000年）4月1日発行

新入生への訓示

技術者である前に豊かな人間であれ

学長 神馬 敬

入学おめでとう。諸君は大勢の志願者の中から選ばれて日本工業大学に入学されました。これからは選ばれた人としての誇りをもって学業に精進されることを願っています。

本学は、もの創りに長じた、独創的、実践的な技術者の育成が目標です。国際化時代を迎え、実用英語とコミュニケーションの能力、異文化に対する包容力も不可欠です。更に言えば、技術者である前に、責任感、正義感、思いやりの心と社会人としての常識、作法を心得た自立した人間であることが必要でありましょう。

このような多方面の能力と人格の形成は、本学の教育課程だけの問題ではありません。しかし、諸君が本学で勉強されるのは人生で最も活力の溢れる期間に当たります。勉強は勿論大切ですが、体力づくりと生涯の友人を見つけることを心掛けて、技術者の理想像に近づいていただきたい。学内の行事や活動に積極的に参加され、体も心も大きく成長されることを望みます。

今年四月から学校教育法が改正されます。各大学とも、一年間又は一学期に履修科目として登録できる単位数に上限を定める検討が義務づけられました。一年間で三十単位を取る場合、予習と復習を含めると週四十五時間の学習時間を確保しなければならないのが本来の姿です。従って、一年間に履修できる授業の標準は九科目、三十六単位程度となります。基礎科目の学習に時間をかけて十分に理解して欲しいというのが履修科目に上限を設ける理由です。

本学では、重点科目は少人数のクラス分けにし、完全理解を目指しています。又、一日の最終の講義は四時四十分から六時十分ですが、出題内容によっては八時過ぎまでかかる時間無制限の演習があります。四時間近く、担当教員と数名のTA（講義補助の大学院生）がつききりで指導し、受講生が理解するまで帰宅させません。

時間無制限の演習は、学生の自宅での復習、予習に期待するより、大学で長時間勉強させて徹底理解させ、帰宅後はリラックスさせる方が教育効果が上がるという考えです。

学校教育法の改正では、成績優秀者が三年間で大学を卒業できる途も開かれました。この改正を受けて、本学ではこの四月から三年計画で新しい教育制度の開発に取り組んでいます。

高校生が大学の科目の一部を履修した後、大学に入学する制度の試行です。大学三年間で卒業研究まで含めた科目の履修を目指します。この制度は、大学一年生の六月から自発的にシステム工学科の研究室において血管内走行ロボットの方向制御の研究に取り組み、米国の学会で講演発表した本学の学生の例を参考にして企画しました。

技術者には人としての年輪、経験が必要です。そこで、高校三年間に大学の科目を先行して履修し、大学では三年間で卒業要件を満たした後、残りの一年間を有効利用する制度を試行しようとしています。

有効利用としては、海外提携校での語学研修、単位取得、異文化体験、国内外でのボランティア、企業でのインターンシップ、教員免許状取得、大学院への進学あるいは科目履修等、いろいろ考えられましょう。

「何事にも無我夢中で努力すれば道が自然に開けてくる」という、土屋義彦埼玉県知事（本学名誉博士第一号）の言葉を諸君に贈ります。

特別寄稿

「感性と教育」シンポジウムに参加して

内田 盛也

平成11年11月29日、東京国際フォーラムで、河合隼雄（臨床心理学者）、如月小春（劇作家・演出家）、西澤潤一（前東北大学総長）三先生による鼎談「感性と教育はどうあるべきか」が行われた。この話し合いの中で自らが参加した気持ちで次のようなまとめを行ってみた。

「ヒト」は生まれながらにして、天分というものがある。西澤先生の言によれば、個々のDNAで決定されている。

その持てる感性の門を如何にして開かせるかが大切である。感性は、幼児、小中学生、高校生位迄教育によって育てることが出来るというアンケート調査の発表もあった。中でも、幼児体験が大切との話もあった。

幼児は、先ず母親に接し、次いで、両親・家族と成長する過程の中で世界を共有し、持てる感性と理性が磨かれて行く。最初は、何よりも五感（触・色・音・味・臭）による応答と活動が始まると考えると、感性への刺激とパターン認識によって、「喜怒哀楽」が行動として表われる。こうして、それぞれの天分に応じた自己実現と環境調和を体得して行くことになる。

したがって、諸先生共に感性刺激と全身を震わせる感動が感性の門を大きく開く鍵と言っている。そして、両親が最大の教師であるとも言っている。

象を子供に教えるために、父親は、ビデオでアフリカ生息の状況を教えると言い、母親は、動物園へ行くべきだと言い両者の討議の結論が出ない例も紹介された。絵本で象を知っている子供に先ず、動物園で本物を見て、長い鼻と大きい体に動く子供と象の出会いをさせ、感激することも正しいし、また動物園が住処では無いことを教えることも必要との話であった。これは感性と理性の調和と子供への導入の仕方であろうと思う。

こうして考えて来ると、幼児に接する母親による子供への影響力の大きさ、また小学校の低学年までは、先ず両親と教師は、子供の新世界への感動の機会と場を作り、一人一人の異なる感性発揮を認識しつつ、複雑な高度文明社会へ調和する理性の基礎を教え、現実に社会対応が出来る力をつけさせることが重要であると思う。「生きる力」への意欲と最低限の行動力の基礎知識の賦与である。

頭と心と体、三位一体の健全な発達をどのようにしたら良いのか。子供は親を見て行動する。その親達が自然との関わりの減少と、人工社会での複雑な仕組みの中で迷いの多い現代では、子供も迷い感性の門は開かれない。徒らに周辺の学歴志向に惑わされて、心も体も不十分で、生きる力と環境対応への行動に対する意志への規範も持たない状況で、知識のみつめ込まれては、欠陥人間しか出来ないのは当然である。

高偏差値で、医師志望の魂も無く、すすめられるままに超一流大学医学部へ行き、初めて病院勤務となって患者、看護婦等から相手にされず、人間としての存在価値を否定されて初めてそれまでの偏差値中心の価値観を抹消され、絶望のあまり自殺に走る事例も紹介された。その長兄は自殺、次兄は医師となってやはり自殺を思い、死んだつもりでカンボジアで3年間乞食をして、自己を見つめ人間の尊厳の在り方を体得することで立ち直ったそうである。しかし、そのことは兄でも弟に教えてやれない。自らが解決するしかない、と言っていた事例の紹介もあった。

人間として生きる心と力を基礎として与え、自分の目指す人生航路を見出すための夢と感動への感性の大門を開く機会を作り、感性を引き出すガイドをする事が教育であろう。そしてその針路を旅するための航海術を教え操船する経験と海図無き未知の海を開拓する精神とその目的達成への学ぶ道筋と力を引き出す事が高等教育の役割であろう。その選択を若者が出来るように個性輝く大学への脱皮が今問われている。

内田 盛也氏
帝人中央研究所長、生産技術研究所長を歴任され、日本学術会議第5部（工学）部長としても活躍された。

人類が誕生し、自然との関わりの中で、「生きる力」を体得し、子孫へ伝承し、人間らしい喜怒哀楽の感性を育みつつ社会を形成して生きる意欲を維持して来た長い歴史をふまえて、この向千年の経過を子供達の短い成長期の間に感得させる事が教育の本質であろう。

一方、日本刀、戦闘機などの兵器にも極限的機能美の存在、商品選択に対する生活者感性の厳しさなど、工学と感性はかかわり深い指摘が西澤先生から説明があった。

明治初頭、イギリスに留学した山尾庸三は、帰国後工部大学校（東京大学工学部の前身）を創立し、幅広い教養2年、専門2年、実学2年の教育システムを実施した。また同時に東京美術学校をも創設している。造船技術を学んだ山尾は、船は機能だけでなく美しくなければならないとの思想から東京美術学校を創ったといわれている。

現代のビジネスは、「芸術と工業製品をつなぐ付加価値」を求める生活者の選択消費革命に直面している。

文化が経済となり、文化とは「生活様式」それ自体であるから、理性と感性の調和と活用が工学では必要となっているのである。

画一的教育と偏差値主義に対して疑問が湧き起こり、この2年の金融革命を契機として、国民全般に価値観の見直しが急速に浸透しつつある今、このシンポジウムの内容は、それへの解答の一つとなるものと思われる。

日本とフランスの感性刺激の場の相異として、パリのオルセー博物館で子供達が寝そべったり、それぞれの姿勢で名画を模写している姿、それも模写とも言えない書きなぐりを行っている状景は、日本では見るべくもない。

この話から、イタリアの北部のファッション産業興隆の原因が、この地域の町全体が芸術的たたずまいを持ち、生まれてから日々の生活の中に芸術がかかわりを持つ環境、それが感性豊かな産業を育てている事と相通ずるものを感じた。

日本は、それぞれの地域の特徴に応じた文化の香りを直接子供達にふれさせる事が必要なのであろう。

暖かい家庭、冷たい家庭、どちらが感性の涵養に有功かとの質問も出ていた。冷たいと言えば、アメリカでは凄まじい例があると河合先生は事例を紹介された。父親が母親と別の女性と去り、母親もまた別の男と去る。子供は様々な障壁に直面しながら生きていく、そうした中でも感性豊かに優れた人物に育った例がある。

日本の問題は、刺激のない中の狭い暖かさと冷たさの間にあって、似通った団地のオールサラリーマン家庭の相互比較に刺激を求めている現状が最大の問題であろう。

また、アメリカのホスピスで、死期が迫る病人達に愛される看護婦の話、医師達もどうして好かれるのかわからない。病人が医師に「あの方が我々に好かれる理由が判りますか」の問いに、医師は「判りません」病人は「自分達は死期が迫ってくる身だから判ります。あの方が入ってくると体と心共に入ってくるのです。他の方は体だけでやってくるだけで、それが違うのです。」これは本当に味わいのある話である。

心から子供を思う親や教師は、子供達自身がそれを感性で感じ取ることと同義であるように思う。職業人として身も心も一体として仕事をする人が最近減ってきているのではなかろうか。その事情は製品が知っており、それを失った技術と作品は事故を起こす。色々な事故の報道がある度に、技術者として現場に張りついて、知性と感性とグループの共同体意識で開発、設計、操業して行ったあの感動のドラマを今の人々は体験していないのではないか。また、名も無く定年を迎えて去って行った技術者が、日本の強靱な競争力のある製造業を創り上げてきた夢を伝えられていない事も事実で、こうした事柄が理科離れの遠因でもあるのではないかとの思いを至していた。

このシンポジウムの一日は、本当に考えさせられる事の多い充実した内容にふれるものがあった。

●教務部長からの助言

国際時代に対応して英語力アップを目指せ

廣瀬治男教授（電気電子工学科）

●あなたの基礎学力は？

少し緊張気味の新入生のみなさんにこれからの大学における学修について助言する。まず、オリエンテーションをしっかり聴いて下さい。さて、初心を忘れるなと言う。今のみなさんはこの初心の内にある。その初心の中身とは多分、自分が、大学で、はたしてちゃんと学修をやって行けるのだろうかという心配であろう。その意味では、本学は極めて滑らかな繋がりを工高の授業との間に設けているので心配は要らないと思う。普通高校出身のみなさんには英語や数学の科目の中では初めは授業が易しくて手応えが無いものも在るかも知れない。その時は難しい授業に挑戦してもらいたい。専門の科目が始まると立場が逆転する事もあるので工高出の友達を早くつくって互いに教え合うのが良い。教育の課程が異なる人たちの出会いを絶好の機会と考えるのである。工業高校では右脳を使う科目が多いから、お互い、右脳と左脳のバランスのよい技術者を目指したいものである。

●チャレンジすることが大事

このところ、本学の教員の間で話題になっていることは最近の入学生は基礎的学力が以前に比べて低下しているようだということである。高校のカリキュラムが変更になって、それは中学、小学校からの接続でもあるが、以前の入学生に比べて数学その他の力が足りないようだというのである。これは諸君の直接の責任ではないが結局は自分の学修に関係するのであるから、大学の授業はちょっと今までよりは歯ごたえのある科目に挑戦してもらいたい。もし、ある授業へ出て教員の話が皆目分からないようであったらその科目の修得のためには自分でもっと基礎になる科目を予め修得してからになる。しかし、易しい科目ばかりを選んでいては、実力はそれなりになると心得る必要がある。多くのメニューがあるのにカレーライスばかりを食べているような習慣はせっかくのご馳走を逃してしまうことである。貴重な青春のひと時を無駄にしてしまうことになる。

●何のための学生生活か

何のために入学してきたのか何も考えていない学生諸君もいるようである。そんな諸君は一年生に与えられた科目の中から春学期として二十単位程度を履修申告しておく。そしてまずは大学生活に慣れることである。何をやるのが良いのか、友達をつくって話し合ってみる。授業やゼミナールあるいは先輩の〝つて〟でもよい、どこかの研究室へ出入りさせてもらえると今後の大学生活が面白くなると思う。そして自分の目的をはっきりさせよう。クラブや同好会に所属するのも良い。実は四年生になっても未だ自分の職業を決めかねている者は案外多いのである。アルバイト程度でしか仕事、職業の内容を知らないのであるから、本格的な技術者として自分が通用するのか不安なことは誰も同じなのである。会社見学やインターンシップに積極的に参加するとよい。会社へ入って初めて自分が本当は実力があるんだと分かったと言う人も結構多いのである。

●インターネット時代の英語の力を

工業高校では普通科に比べて英語の時間が半分から三分の一程度しかないと言われており、さらに自己努力を積んでいないと高校三年のときは英語から離れている人も多い。大学へ入ったらその力では学卒と呼ばれるに値しないと心得て、ここ、一、二年のうちにある程度英語の力をつける努力が求められている。ある程度とは英検三級を指す。なんだ三級なんかずっと前に取っているという人もいるだろう。中学の単語の範囲と大学の単語では数倍以上差があるので同じように三級といってもちょっと違うかもしれない。また、実際にインターネットで外国のウェブサイトに入って行くにはそれなりの言葉が分からないと無理である。辞書を相手にがんばってみるのが良い。最後に、これからの学修にまじめに対応しようと思っている今の気持ちを大切にして、新しい可能性を開く大学生活を存分にエンジョイしてもらいたいものである。

自己を発見する学生生活を

機械工学科主任――村川正夫教授

機械工学科の新入生諸君、そして全学の新入生諸君、日本工業大学へようこそ。大学への入学は間違いなく人生の大きな節目であり、周囲のだれからも祝福されるスタートです。日本工業大学での四年間を思い切りエンジョイされると同時に、実りあるものにされん事を祈っております。

大学生活をどう過ごすかはひとえに諸君の考え方にかかっております。つまり、どのようなキャンパスライフをデザインするかは全く諸君の自由にまかされているのです。それほど大学という所は今までと比べれば自由な生活の場である事を諸君は発見する事でしょう。

ただ、人生の先輩として一つだけアドバイスをしておきたいと思います。それは、四年後の卒業時において自分は少なくともこれだけは人に負けないもの、人と違うものを身につけたと胸をはって言えるような学生生活を送って欲しいということです。

一つの目標を

電気電子工学科主任――高橋篤夫教授

新入生諸君、入学おめでとう。マルチメディア、インターネット、衛星通信など、ＩＴ革命の根幹技術としての電気電子工学を学ぶ諸君の未来は輝かしい。

電気電子工学科では、特に入学初年度を重視して電気工学特別演習という科目を設け、諸君を大いに鍛えるべく、教員全員が張り切っている。

ただし四年間は短い。大学生は勉強にも、生活にも自主性が求められる。人生の基礎を築く四年間を有効に過すためにも、流れに流されるのでなく、自分なりの目標を一つ設定すべきである。

クラブ活動でも友達づき合いの中でもよいが、四年間折にふれて自己点検でき、それに向って努力できる目標がよい。社会に出てからも、一つの節目毎に目標を設定して努力することは重要で、学生生活はその練習のチャンスである。

四年後、実力的にも人間的にも大いに成長して本学を巣立つよう期待する。

建築学を研究しよう

建築学科主任――伊藤庸一教授

建築を志す皆さん、建築学科にようこそ。

地方から出てきてまだ不安だらけの人、建築は好きだけれど勉強が苦手と思っている人、建築の勉強は初めてで心配している人・・。建築という目標さえ同じであれば、皆さんは建築学科の仲間である。さあ一緒に勉強を始めよう！

建築を一言でいえば、毎日の生活の舞台づくりである。毎日寝起きする住居に始まり、公園、道路、商店街、駅、大学、海や山・・、人のいるところすべてが舞台となる。毎日の生活に欠かせない電気やガス、水道をどのように計画するか、その一方で地球環境への負荷をどれだけ少なくできるかも建築に含まれる。ハイテクに支えられた建築もあれば、歴史を感じさせる町並みも建築の領域である。建築は宇宙のように広大で、芸術のように心を酔わす。私たち建築学科の仲間と建築学を探究しようではないか。二一世紀の建築は君たちが主役なのである。

創造性の育みに向けて

システム工学科主任――伊原征治郎教授

皆さんが学ぶ技術の分野は、今世紀に急速な発展を遂げて、私達に無数の便宜を与えてくれました。しかし、同時に、環境問題、資源問題、技術のリスクの問題など、多くの宿題を作り出したことに気付かれていることと思います。二十一世紀の技術は、これまでの技術の宿題をかたづけながら変革しなければなりません。このようなことから、新世紀の技術者には、従来よりさらに創造力が求められ、創造性の育成が大学教育の大きな目的となっています。新しい物を創造する方法に定石はないようですが、創造的な人の特質には、物事を構想する意志、自由な精神、制約を乗り越える修練、などが共通項としてあげられています。このような特質は、皆さん全員が、日本工業大学で学ぶことによって、必ず身に付けることができるでしょう。創造性に向けて、楽しく、真剣に努力されるよう願っております

論理的思考法の獲得を

情報工学科主任――松田郁夫教授

新入生諸君、入学おめでとう。本学は、諸君がよく理解しているように、実学に重きを置く学舎である。情報化時代の実学の一つの根幹は道具としてのコンピュータの活用である。教育の情報化が進んだ米国では、八〇年代より小中学校にコンピュータを導入し教育技術として活用されてきた。大学における教育においては文系、理系を問わず、当然のこととしてコンピュータの活用を前提としたものとなっている。このとき問題になるのは知識の量ではなく論理性や整合性である。諸君が高校段階までに受けた教育においては、多くの場合、知識の量を試すことに重点が置かれていたように思われる。大学での教育では、コンピュータの活用を前提とすると、知識の量ではなくて、それらを結合して新しい問題解決をはかる論理的な思考法が中心になる。このような術を身に付けることが望まれる。

表現力を磨こう

共通系主任――船橋昭一教授

日本工大入学おめでとう。西暦二千年紀の始まりに大学入学を果たし、諸君は希望に満ちていることでしょう。諸君を迎えるに当たって一言。この機会に表現力をいっそう磨いてください。皆さんに求められる力は、書くこと、話すことの両面と考えてよいでしょう。共にすぐうまくできるものではありません。経験を重ねることです。それには日常の場面を利用することです。科学の文章や論理の文章を自分の言葉で綴り、発表のパフォーマンスを実践して経験を積むのです。この為には日常の「読み、書きの訓練」と「パソコンの駆使」は欠かせない努力です。大学では平常の授業のほか著名な人の講演や卒業研究の発表会で人の話を聞く機会が沢山あります。最初は模倣でもだんだん自分の型を作って行くことです。このために元になる幅広い知識を養い熟成してください。加えて興味のある話題の周辺の知識拡大やいわゆる耳学問も大切です。

入学おめでとう

機械工学科

「知の宝庫」の活用を

理事長
大川　陽康

新入生諸君、晴れての入学、まことにおめでとうございます。私は諸君が学園の一員として仲間入りされたことを、衷心より歓迎致します。

さて私は、諸君がこれから本学において学問に取り組まれるに際し、以下の三つの点を、しっかり胸に刻み込んで下さるよう、注意を促しておきたい、と思います。

その第一は、「第二の産業革命」とまでいわれる今日、その新たな事態に備えて、何はともあれ工学の基礎知識だけは、確実に身につけて頂きたいということであります。

特に諸君もよくご承知のように、現代は情報技術の進歩発展に、まことに目を見張るものがあります。しかし誤解しないでほしいのは、「IT技術」とは、単にコンピュータ操作うんぬんの話ではないということ。つまり、それはあくまで物事を目的に沿い、合理的かつスピーディーに運ぶための手段であって、真に備えるべきは、目指す分野の高度な理論や技術でなくてはならない、ということであります。

第二は、国際化時代に通用する知識や豊かな教養の育みであります。ご承知のように、現代は生産工場の海外移転や製造部品の輸出入が当たり前の状況です。ゆえに国際センスの錬磨や異文化理解は必要不可欠。さらに地球規模で駆けめぐるインターネット情報を有効に活用、世界市場に通用する独創的な技術を生み出すためには、英語能力の習得には心して取り組まなければなりません。

さらに指摘しておきたい第三の問題は、いわゆる環境保全への対応であります。この点に関しては、連日のように新聞やテレビが報じておりますので多言を要しないでありましょうが、二十一世紀のものづくりの命題が、省資源・省エネルギー・あるいはクリーンエネルギーの利用等にあるということだけは、銘記しておいて下さい。

お気づきになったと存じますが、本学ではこの四月から、本館屋上に設置の国内の大学では最大能力をもつ太陽光発電装置が稼動致します。正面玄関のダイヤ型モニュメントに貼られたソーラーパネルがその象徴ですが、どうか諸君も、その意味するところを十全にかみしめて下さい。

ともあれ大学とは、自分で考え、自発的に学習に取り組むための「知の宝庫」です。諸君の今後の健闘を期待致します。

◎編入学

電気電子工学科

建築学科

◎編入学

システム工学科

情報工学科

●情報工学専攻

●システム工学専攻

◆博士後期課程

●電気工学専攻

●建築学専攻

●システム工学専攻

●建築学専攻

◎編入学Ⅱ期

大学院工学研究科

◆博士前期課程

●機械工学専攻

●電気工学専攻

平成11年度学位記授与式

約千人が晴れて社会の第一線へ――

三月二十日、多くの者が厳しい就職戦線を戦い抜いた先輩たちの平成十一年度の学位記授与式（卒業式）が、挙行された。

式典は午前十時三〇分に開始、学部・大学院の卒業生、約千人に対して神馬学長より学位が授与され、正午前、滞りなく終了した。

卒業生へのはなむけの言葉として学長は、「今後多様な経験を積み重ね、面白い発想に基づくものづくりが出来る人間になってほしい」と力説。また大川理事長は、「技術の発展は日進月歩。従って、今後もつねに学び直しの姿勢が肝要」と訓示。さらに「本学で培った工学的感性に根ざして、大いに健闘してほしい」と励ましの言葉を贈った。

新入生も、四年後に全員が晴れて学位取得が成るよう、日々の学習に勤しんでほしいものである。

特別ルポ

機械工学科の《企業見学バスツアー》

見て、触れて、職場を定める!!

OB諸兄の健闘が就職活動の励みに

相変わらず厳しい状況下にあるが、すでに本年の就職戦線がはじまっている。そんななか、機械工学科では、新四年生を対象に就職指導委員の玉木教授の肝入りのもと、産学リエゾンセンターの増田教授の尽力を得て、三月八日から十日にかけて、企業見学ツアーを実施した。目的は、「人生を左右する職場を目指すに際して、単に資料やインターネット情報だけではなく、実際に企業現場を体感。そのうえで自己の目標を決めるよすがにしてほしい」（玉木教授）との点にあった。見学企業は、地元埼玉県下の十社。「いずれも中堅企業ながら、高い技術力に基づき海外展開も行っている所ばかり」（増田教授）。それは昨今、「就職」とはいうものの、どうしても「就社」に傾きがちな上滑りな傾向を是正し、真に大学で学んだ技術や知識を活かせる職場を見定めることこそが大切、との配慮による。

見学ツアーの初日に同行、学生たちの感想を聞いたが、「参加してよかった」「就職活動の意欲が湧いてきた」というのが概ねの声。さらに各社で活躍されている本学ＯＢ諸兄の助言に、大いに勇気づけられたようだった。

ちなみに三日間の参加人員は、約五十名。近年、企業へのインターシップの必要性が説かれているが、できれば他学科でもこのような体感ツアーを実施し、本学が踏襲する「実学」に、ずしりと骨太い磨きをかけて、ことに対処する姿勢が望まれる。

（編集部）

868名の従業員を擁する日本ワイパーブレート㈱に到着

小グループ毎に製造ラインを見学

製品を手にする学生たち

工場内で幹部から念入りな説明を受ける

日本ワイパーブレード㈱

自動車のワイパーのブレードとアームを製造、この分野では世界No.１メーカー

（日工大OB：20名）

見学のポイントを説明する増田教授

「会社の宝」といわれる金型づくり40年の熟練工

CAD／CAMを駆使する設計部門風景

池上金型工業㈱

プラスチック用射出成形金型設計制作、および金型用特殊機材の製作で高度な技術を誇る

（日工大OB：６名）

金型を手に技術の内容説明が…

居並ぶ最新鋭マシンの一部

社長自ら微細な部品を手に説明

多忙な時間を割いて日工大OBも後輩に貴重な助言

参加学生たちの真剣なまなざしに就職活動への意欲が

㈱サン精密化工研究所

主に磁気・光関連の超精密部品の樹脂化と光学部品の技術開発で定評を有する

（日工大ＯＢ：11名）

工場のアイドル、ポチ君も歓迎に…

新入生へのメッセージ

自ら働きかける姿勢を！

学生部長――小林　勉教授

新入生諸君入学おめでとう。

今年は二千年という大きな節目の年であり、なぜか例年と違った印象を持って諸君を迎えることになりました。

大学の四年間は諸君にとっておおいに開かれた世界であるから、失敗を恐れることなく、勇気と希望を持って第一歩を踏み出してほしいものである。

諸君が学生生活を送っている間に、この日本工業大学に入学してよかったと、心から思えるようになってもらいたい。大学は高校時代の延長ではないので、これまでの思い込みや先入観をすっかり取り払いゼロから出発することが大切である。

私が学生部長として何か諸君に求めるならば、第一に、諸君に今の自分を超える大きなロマンを探して欲しい。人間は、えてして易に流れやすく、苦を避けたがるものである。青春時代はすべて実験中であると言われているように、若いうちにやりたいことがあったならば、いろいろなことに挑戦してみることが大切であると思う。一つの体験は成功なり、失敗なりを生むことになるが、たとえ失敗したとしても「まだ若いのだから」と常識を破ることがあっても許されると思う。

諸君の青春の大半は、大学で過ごすことになるから、この大学での生活がプラスになるかマイナスになるか、今から始まったところである。たった一度の青春、単位を取るだけで終わることなく、いろいろなことにチャレンジしてほしい。

ところで、諸君は将来有能なエンジニアを目指して、本学に入学したのであるから、おおいに勉強しなければならない。「技術は人なり」という言葉があるが、造られたものは、造った人の人柄があらわれていると言われている。やはり立派なものを造るためには、感性と心が基本であるから、大学という教育の場でしっかりとした、感性と心を養い、広い視野の基で、価値観や判断力ができる人間として成長して欲しい。

私は常々思うのであるが、最近の学生に大変欠けていることの一つに、周囲に対して自分から積極的に働きかけていく姿勢が乏しいということがある。友人についても、ある日突然現れるものではなく、ごく普通の友人がだんだん深く付き合っていくうちに、かけがえのない友人になる。先輩や、友人は人生の師であり、何ものにも代え難い財産になると思う。

今、進学率が五十パーセントを超えようとし、大学が大衆化して、学生の抱える問題が多くなった。中でも若者のモラリティ（道義）やエートス（倫理観）が欠けていることが指摘されている。私は、諸君が道徳的にもマナーを持った、暖かい人間性のある学生である事を願っている。

宮沢賢治は「人間は自分のために生きなければ生きられないが、他人の為に生きる意思のない者は、幸福になれない」と言っている。

フレッシュマンへのメッセージにずいぶん堅苦しいことを述べたが、どうぞ広大なキャンパスと学風に慣れ、充実した学生生活を送るよう祈っている。

部活で幅のある人間味を！

体育会会長――北村　智之（建築学科四年）

新入生の皆さん、入学おめでとう。現在、初めての一人暮しなど今までと環境が大きく変わり、期待と不安が交錯する毎日であると思います。

ここで少し考えてみてください。四年間という限られた期間で、君は何を身につけられるだろうか。もしも、授業を受け、アルバイトをするだけで四年間を過ごすのでは、すこし寂しいと思います。

所属学科の専門的知識は、授業や研究で学ぶことができます。でも、私はもっとすばらしいものを身に付けられる方法を紹介します。それは、どれでもかまいません、少しでも興味を持ったクラブに入ることです。現在体育系のクラブは二十五団体あり、総勢五百名近くの先輩たちが、汗を流しています。

クラブ活動は何がプラスになるでしょうか。例えば、四年生になって就職活動をする際、面接などで「大学生活でどんなことに打ち込みましたか？」と聞かれたときは、自信を持って「はい、勉強と両立させて、○○に打ち込みました」と、答えられると思います。

また、私は高校の頃に始めた弓道を大学でも続けています。現在は参段ですが、大学から始めても、弐段は容易に取得できます。このように、資格を取得できるチャンスでもあるのです。

自分に何かを身につけたいという人は、是非興味のある部活を見学に来てほしい。もちろん純粋にスポーツを楽しみたい人も大歓迎です。

各施設を充実して、気持ちよく活動ができる雰囲気になっています。

体育会そして各クラブをさらに盛り上げるために、君たちの入部を体育会会員一同心よりお待ちしています。

君たちのためにも…

人間関係の基本が身につく場

文化団体連合会会長――山田　覚（電気電子工学科四年）

大学に入ったらやっぱ部活でしょ。以上。…えっ、ダメなんですか!?では、ちょっと気の利いたヤツでも。

部活動は我々の学生生活に如何様な付加価値を与えてくれるのか。まず、社会に出てからの我々の働きについて考えてみよう。入社したての君は要は下っ端だ。上司や取引先とのコミュニケーションは敬語が基本。礼儀のいろはを身につけて当然、という見方をされる。敬語も礼儀も学校教育の中で少なからず触れてはいるだろう。しかし、実際にそれを用い、より優れたモノとする機会を学校教育は与えてくれたであろうか。もちろん否である。義務教育は教養を活かす術までは教えてくれない。なぜなら知識を活かす知恵、いわばコツは社会に君臨するリッチメン達の武器であり、そいつをすべての民に平等に与えてしまったらリッチメン達の商売はあがったりである。人生のコツをただで渡すなと某組織が文部省に圧力を掛け…

だからこそコツは自らの体で手に入れるのだ。

そんな世知辛いご時世、私がお勧めするのがこの部活動。無理なく優れた環境（？）で己を磨くことができるとっておきの機会である。人間関係の基本から多彩な技術と知識。そしてバイトだけでは得ることの出来ない人と人との横の繋がり。自分の部活と他の部活が出会ったときに本当の部活の面白さを味わうことが出来るのだ。もーホントこれが醍醐味。しかしながら多少の辛さってのもある。でもね、楽しさってのは辛さから生まれてくるものさ。現代の無気力大学生に効く、部活〜。おためしあれ。

英会話　カナダ特別セミナー

研修生募集案内

本年も夏季休暇を利用しての「英会話カナダ特別セミナー」が実施される。

目的は、国際時代に不可欠な英会話能力を、現地の家庭にホームステイしながら、カナダ第二の港湾都市にある名門ブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）に通い、TESLの資格を有する優れた専門スタッフからレッスンを受けるというもの。

ちなみにUBCは、十二の学部からなる総合大学で、そのキャンパスは、学内にゴルフ場をもつほどの広大さ。付属病院をはじめ、銀行、郵便局、カフェテリア、売店なども設置され、環境はまことに申し分ない。

写真上＝昨年度の参加メンバー。下＝ロッキー山麓での爽快な川下り

授業プログラムは、午前中三時間、十人程度のクラス編成で推進。また時にバンクバー市内を散策しながら市民と交流する実践的なプログラムも用意されており、短期間ながら、かなりの力がつくように執り行われる。

無論、せっかくカナダの大地を訪れる以上、雄大なカナディアン・ロッキーの景勝地として知られる、あのバンフへの二泊三日の旅など、楽しいオプショナルツアーも用意されている。

なお本セミナーは、一年次から四年次までを対象とした正規の英語授業科目で、参加者には二単位が与えられる。

ともあれ卒業後企業仕会で立ち働く条件として、国際語である実用的英会話能力を身につけていなければ、話しにならない。したがって、本研修は、その基礎的素養を形作るまたとないプログラムである。

希望者は、教務課に詳細なパンフレットが用意されているので、ぜひ一読を。

なお参加費用は、四十九万八千円。もちろんローン利用もOKなので、気軽に担当者に問い合わせされたい。

STUDENT FACE 2000

■新生「車輌製作部」を背負って

螺良　智史　君
高澤　昌樹　君
（ともに機械工学科二年）

平成三年から九年まで、ホンダエコノパワー燃費競技大会で七連覇の偉業を成し遂げた本学の自動車部。歴代の部長の名はその世界では鳴り響いており、当時真岡工高で自動車部に所属していた螺良智史（つぶらさとし）君も、「日工大に進学したら、あの先輩方と一緒に車を作るんだ」と期待に胸ふくらませていた。一方、車両製作の経験がない高澤昌樹（たかざわまさき）君も、日工大に進むからには自動車部に入ってがんばってみようと思っていた。

そんな二人を含む新入生十四名が、二年前の四月に入学したときに待っていたのは、自動車部の廃部という現実。大会優勝へのプレッシャーや過酷なハードワークがたたって、当時の自動車部には部員同士の衝突が多かった。そのため彼らが入る直前には、残る部員は四年生一人のみ。見切りをつけた先輩は、早々と廃部の手続きをとっていたのだった。

この事態に納得のいかぬ彼らは新しいクラブ、「車両製作部」を発足させた。部長には螺良君が就任。高澤君は、一年生ながら文化系のクラブを束ねる「文団」の役員にも名を連ねることとなった。

新生車両部には過去の遺産が何もなかった。自動車部時代のノウハウはもちろん、当時の車も工具も材料もない。だが、そんな彼らにも協力してくれる人はたくさんいた。組織としての立ち上げには先々代の文団会長。研究室から不要になった工具をもらってくる時には学生自治会の先輩。機械工作センターの先生方には、今でも技術指導を受けている。さらには、以前自動車部をやめた先輩も陰に日に応援してくれた。人間関係がこじれて退部したものの、車作りへの情熱をいまだ捨て去ることができないのだろう。

燃費のよい車の条件は、車体が軽いこと、空力特性が良いこと、という単純明快なものだが、それを実現するためには、独創的な車作りだ。これには、正統的な車作りの自動車部とはちがう方法で成績を出してやる、という意地もあるようだ。

しかし、現実の車は意地だけで動くほどあまくない。一年生の時の車は結局動かずじまいだったし、今でも時おり理由もわからず燃費が落ちることがある。突然動かなくなった車の原因を全員徹夜で解析したら、ガソリンのせいだと判明したこともある。どうやらスタンドで粗悪品を売りつけられたらしい。厳密な調整を繰り返したエンジンだから、少しでも質の悪いガソリンを入れるとすぐに動かなくなる。予算不足だからといって、安いスタンドを捜し歩くのも考えものだ。

車両部内では、部長として先陣を切って何にでもチャレンジする螺良君、時に暴走しかねない彼のブレーキ役を果たす高澤君となるようだ。これは螺良君が高澤君を評する時の「頑固」、高澤君が螺良君を評する時の「だらしない」という敬愛のこもった悪口からも感じとることができる。

＊　＊

君たち、本当にいい仲間に恵まれたね。大会の優勝カップはまだでも、すでに君たちはそれ以上のものを手にしていると思うよ。

（塚）

砥粒加工学会賛助会員 新技術・新製品発表会

本学にて開催

中2階ホールを利用しての展示会

三月十日、本学の学友会館にて、第三回《砥粒加工学会賛助会員／新技術・新製品発表会》が開催された。

参加企業は、旭ダイヤモンド工業㈱をはじめとする二十六社。これに各大学などの研究者も加わって、約百五十名ほどが熱心に質疑を交わした。

ちなみに発表プログラムは二部門に分かれ、前者は『研削・研磨工具・技術の紹介』、後者は『研削盤・研削関連装置・技術の紹介』で、いずれも先端技術を駆使した意欲作が、ずらり展示された。

このように、小規模ながら新技術の粋を集めた発表会の意義を、守友貞雄学会会長は、昼食会の席上、「砥粒加工技術の発展に照らして頼もしいこと」と力説。また本学の神馬学長は「実学を旨とする本学で、かかる創造性に満ちた催しに協力できることは栄誉のこと」と挨拶した。

昼食会で挨拶の神馬学長

近事片々

OB便り

裏方の打撃投手に誇りを感じた大学時代

水野　弘輝
建築学科（第22期生）
㈱巴コーポレーション
建設設計部勤務

夏雲の彼方に飛騨山脈を望む松本市営球場のマウンドに、私は立っていた。

長野県大会準々決勝、対東海大三高戦であった。

高校入学以来、肩の故障のため満足な練習ができなかった私にとっては、最後の晴れがましい舞台であったが、緊張することもなく私は投げ続け、六回を一失点で押さえ、長野工業高校に勝利を導いた。

翌日の対上田高校との準決勝では、先発投手が試合開始早々連打を浴び、降板してしまったため、急遽私に出番が回ってきてしまった。リードを許していたせいか、私は何の気負いも無く無心にボールを投げ続け、七回にマウンドを譲るまでノーヒットノーランの思わぬ好投をしてしまった。

残念なことに、準決勝で敗退してしまったが、県大会の様子をネット裏から観戦していた、中日球団の堀込スカウト（南海→中日）の注目するところとなり、その年秋、私は中日球団からドラフト外で入団を誘われた。

私を高く評価してくださったことに対して戸惑いはあったが、既に日本工業大学建築学科に進学が決定していたため堀込さんに入団の意思のないことをお伝えした。

これで、やっと野球との縁が切れると思った矢先の入学してまもない頃、母校長野工業高校建築科の先輩が私のアパートに突然やって来た。

北沢さんという、小柄な人で野球部の敗戦処理専門の投手と名乗っていた。北沢さんは、同郷のせいか、信州訛りで巧みに私を野球部に勧誘した。

最初は、何とか勧誘を逃れたが、熱意にほだされ悪い一味に加担することになってしまった。

北沢さんが言う通り、野球部員は、肩の持病を持った私を温かく歓迎してくれた。私は、そんな部員の人たちに報いるために、久々にマウンドに登った。

今度は、専ら打たれることが専門の打撃投手である。コントロールには自信があったので、ひたすら投げ続けた。

私が、打撃投手になんのこだわりも無く専念できたのは、当時大学院に在籍していた野口健さんが研究の傍ら、後輩たちの打撃練習で、投げ続けていた姿に接したからだ。大学では裏方専門の四年間だったが、部員からは信頼された打撃投手になれたことに誇りを感じている。

平成四年、私は日本工業大学の建築学科を卒業して㈱巴コーポレーションに勤務することになった。

最初に担当した仕事は大学の九号館の新築工事で、ライフストアの近くの店の二階に間借りして工事事務所に通ったが、大学に通学しているような妙な気分になったことが、つい昨日のような気がして懐かしく感じる。

その後、数カ所の工事を担当して、現在は建設設計部に籍を置いている。建設設計部での私の仕事は、構造物の構造設計が主なもので、パソコンと毎日格闘している。

学生時代は、建築にはパソコンなど無用なもと思っていたが、実際に毎日使用していると、今後の建築の仕事にはパソコンの素養が備わっていなければ、仕事にならないことを実感した。

そして、平成十年一級建築士を取得し、なんとかこの業界で生きて行けるような自信が湧いてきた。野球に例えれば遅まきながら、レギュラー選手としての定位置を確保したような気分である。しかし、挑戦はまだ始まったばかりである。

新・英文大学案内完成!!

日本工業大学

PROFILE OF N.I.T.

留学生の獲得や、先生方の国際学会出席の際、さらには各種の国際交流活動などで配布していただく英文版大学案内が、三年ぶりに改訂された。

内容は従前版と、ほぼ同じであるが、今回は来学者のためにキャンパス・マップが加味されている。

ウーン、これはいいネ!

入念なパネル展示も

参観を待つ開発者

新任教員プロフィール

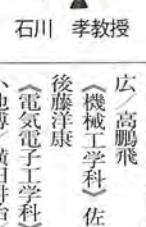
本年も、また高い業績と豊かな経験を持つ先生方が就任された。学生・職員ともども、早急にお顔を覚えて、積極的にご指導を仰ぎたい。

矢部正行教授

◆矢部 正行教授（情報工学科）昭和十九年六月七日生まれ。平成十二年三月東北大学大学院情報科学研究科情報基礎科学専攻博士後期課程修了。博士（情報科学）（東北大学）。前三菱電機（株）勤務。

石川　孝教授

◆石川 孝教授（情報工学科）昭和二十五年十二月三十日生まれ。平成五年三月筑波大学大学院経営・政策科学研究科修士課程経営システム科学専攻修了。博士（工学）（東京工業大学）。前木更津工業高等専門学校助教授。


吉崎拓男講師

◆吉崎 拓男講師（機械工学科）昭和三十八年五月二十一日生まれ。同六十三年三月東京理科大学大学院工学研究科修士課程機械工学専攻修了。博士（工学）（広島大学）。前広島大学助手。

瀧ヶ崎隆司講師

◆瀧ヶ崎 隆司講師（共通系）昭和四十年三月二十七日生まれ。平成五年三月早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程心理学専攻単位取得満期退学。文学修士（早稲田大学）。前早稲田大学教育学部助手。

木許雅則助手

◆木許 雅則助手（電気電子工学科）昭和四十七年三月十一日生まれ。平成十一年三月九州大学大学院システム情報科学研究科情報工学専攻博士後期課程単位取得満期退学。博士（工学）（九州大学）。前九州大学大学院システム情報科学研究科助手。

◎非常勤講師

《共通系》平沢剛／保福一郎／池田宏／間下克哉／三浦誠／高坂映子／N・S・HABIB／泉忠司／小屋多恵子／林良子／柳勝己／杵渕博樹／鈴木正憲／荒金幸子／倉本幸弘／中村勝彦／柴田道広／高鵬飛

《機械工学科》佐々木英夫／後藤洋康

《電気電子工学科》上西勝三／小池博／横田耕治／岸敬二

《システム工学科》大塚昭／福田民生／田中伸司／高西忠司

奥田　真教育技術員がタイ国の技術開発賞受賞

電気実験センターの奥田真教育技術員が、タイの特産果実であるマンゴスティンの非破壊検査技法の確立の功績により、同国通商産業省から「技術開発賞」を授与された。

従来、タイ国では、マンゴスティンを輸出する際に、一度切り開き、内部の状態を確認していたが、今回受賞の技術は、波長850ナノメートルの近赤外線を用いる非破壊検査法を確立。これによって、初めて切開せずに糖度などが正確に測定可能となった。

この技術開発は、奥田技術員と本学の学術協定校であるキングモンクット大学トンブリ校との共同研究の成果である。

人事異動

【昇任】

（四月一日付）

◆梅崎 栄作助教授（機械工学科）→教授へ昇任

◆黒津 高行助教授（建築学科）→教授へ昇任

◆成田 健一助教授（建築学科）→教授へ昇任

◆高橋 明遠講師（電気電子工学科）→助教授へ昇任

【異動】

（四月一日付）

◆山地 秀美教育技術員（情報工学科）→講師へ異動

【退職】

（三月三十一日付）

◆仲嶋 桐子事務職員（教務部教務課）

◆日比野 路子氏（学生相談室相談員）

国外出張

三月

◆船橋 昭一教授（共通系）出張先＝韓国（3・13～3・17）目的＝研究打合せのため

◆村川 正夫教授（機械工学科）出張先＝中国（3・27～3・31）目的＝積層造形システムに関する研究打合せのため

◆野口 裕之講師（先端材料技術研究センター）出張先＝中国（3・27～3・31）目的＝積層造形システムに関する研究打合せのため

TOWN & CAMPUS

ポイ捨て厳禁

去る人、来る人――今春も、約千人の卒業生が宮代町を去り、また、ほぼ同数の新入生が、地域コミュニティの仲間入りをした。

そこで新入生に訴求しておきたいのだが、豊かな田園地帯を有する宮代町は、従前より環境面にたいへん力を注いでいる。従って、ともあれゴミの廃棄にだけは、注意を促しておきたい。

高名な民俗学者の柳田国男は、《美しい村》と題する随想で、本来、美しい村は存在しない。村が美しいのは、そこに住まう人々の心が美しいからだ、という意味合いの指摘をしているが、それは「村」を「町」に置き換えても、十分に普遍性をもつ事柄と言っていい。

新入生諸君もご承知のように、環境維持に関して、ゴミ処理問題は、最重要課題でもある。従って、このさき大学で「モノづくり」を究めて行く際、何はともあれ、明確に環境意識の稀薄なモノは、具体化をみないことだけは明確である。

ならばどうするか？

それは小さい気遣いながら、町中で空き缶や煙草のポイ捨てを、絶対にしないこと。なぜと言って、そういう日常的な行為に〝モノづくり哲学〟の根幹が関わっているからに他ならない。

むろん学内でのポイ捨ても、厳禁である。

編集後記

▼満開の桜の下、今年度も二〇〇名を超す新入生が本学の一員となった。年々歳々、年の差が開いていくことは仕方がないとしても、新入生諸君の若い感性についていくことができるか不安は増すばかりである。

▼これからの四年間には平等の可能性が与えられている。その可能性を生かすも殺すも本人の意欲と努力次第。そして、その可能性を如何に引き出して、付加価値をつけてあげることができるか。学ぶ環境を充分に整えてあげることができるか。それが本学の使命である。他の大学に決して劣らない充実した施設設備を用意している。大いに活用して成果をあげて欲しい。▼何もしなければ四年間はあっという間に過ぎていく。過ぎた日々は二度と戻らない。悔いの残らぬよう、常に自分を律して、実りある学生生活を送って欲しいと思う。誰のものでもない自分自身の人生なのだから。

（F）